

## 2 「資質・能力ベース」の授業づくり

### ☆用語解説

「スクール・ミッション」とは、神奈川県教育委員会が各学校の課程ごとに策定したもので、そこには各学校の存在意義や期待される社会的役割等が示されています。

それを受けて各学校が設定する教育活動のゴールが「学校教育目標」です。学校の特色や生徒、家庭、地域の実態に則して定めるもので、4年に一度見直しが図られます。

「スクール・ポリシー」は「学校教育目標」の実現に向けて、より具体的に設定されるもので、入学者向けの「アドミッション・ポリシー」、在学中の「カリキュラム・ポリシー」、卒業時の「グラデュエーション・ポリシー」の三段階に分かれて示されています。

### 学校教育目標を踏まえる

日々教室で生徒と向き合っている皆さんは、生徒をどのような姿に導いていこうと考えていますか。「理想とする生徒の姿」をイメージすると、自身の教育活動に明確な方向性が生まれます。ですが、教員それぞれが別個の「理想像」を目指していたら、生徒に対する一貫した教育活動は実現できません。

そのため、各学校にはその学校の教育活動のゴール、すなわち「学校教育目標」が設定されています。そしてこの目標を実現させるための道標が「スクール・ポリシー」です。これらを意識し、その実現に向けて、全ての教員が同じ方向を目指すことが重要です。同僚と目標を共有することで、互いの理解を深め合うことができるとともに、学校・地域全体で協力しながら、教育活動をより良くし続けていくことができます。これが、カリキュラム・マネジメントに基づく授業改善につながります。

### 「資質・能力ベース」で考えると

これから社会を生きる生徒に必要な資質・能力を、文部科学省は「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」に整理して示しています。この「三つの柱」をバランスよく身に付けさせるために、教科等がそれぞれの特性を生かしながら教育活動を行います。

なお、「定理の正しさを証明する」「意見文を書く」という活動は、どちらも「論理的に考える力」を身に付けることにつながります。このように、所属校の「育てたい生徒像」を実現させるために、教科等が連携しながら「資質・能力ベース」の授業を実施することで「教科等横断的な学び」が実現しやすくなります。

個別支援が必要な生徒への対応を考えよう

### 自立した社会参加に向けて

素晴らしい学習内容でも、一方的に教わるだけでは「資質・能力」のより良い伸長は難しいものです。

将来自立した社会参加が可能となるよう、生徒が自分の意見を持ち、自分で選択し、判断や行動に責任をもつ機会等を設けましょう。

その上で、個々の生徒の特性を見取り、一人ひとりの生徒に合わせた支援を行います。「分かった」「できた」を増やすことで、生徒の自己肯定感が高まるよう工夫しましょう。



# 「資質・能力ベース」の授業づくり

身に付けさせたい資質・能力が異なれば、同じ教材であっても授業の展開は変わります。目標の実現のために最適な教材・言語活動はどのようなものかを考えて授業づくりをすることが大切です。

## 授業づくりの流れ（例）

### 県立かもめ高等学校 学校教育目標

○自分の考えを、臆することなく発信できる人

自分なりの  
考え方を持つ力

失敗を恐れず  
挑戦する力

他者意識をもって  
より良く伝える力

学校教育目標を基に、  
「育成したい資質・能力」  
を具体的に捉えます。

### 教材研究・授業準備

身に付けさせたい資質・能力の決定

身に付けさせたい資質・能力を決定します。その資質・能力に対する生徒の実態を事前に見取ることも重要です。

資質・能力の育成に適した素材の選定

素材は教科書所収のものに限りません。  
教科専門力を発揮して選定しましょう。

「問い合わせ」の設定・言語活動の検討

素材を教材として生徒に提示する方法を考えます。「問い合わせ」と言語活動が、目標にした「身に付けさせたい資質・能力」とつながるようにします。

### 学習活動

学習状況の見取り

生徒の活動状況をよく観察し、補助発問を入れたり、個別に支援したりするなど、柔軟な対応を心掛けます。

### 単元の終わり

振り返り（省察、リフレクション）

単元の学びを振り返ります。生徒のメタ認知の場であり、教師自身の授業実践に対する省察の場でもあります。

### 観点別学習状況の評価

→ 4章 - 1

## 何のための活動？

「ICTの活用」「活発な話合い」…。良い活動ではありますが、活動自体が目的になつていませんか？例えば「美術・工芸」の授業なら、作品の制作自体が目的にならないように留意が必要です。陶芸の授業の目的は「陶芸をすること」ではなく、「陶芸」という学習活動を通して身に付けさせたい力を育むことです。そのため、「子どもが使いやすい器」という題材で、目的や機能などを考えた表現力の育成を目標に設定したり、「自分の気持ちを表した造形（抽象彫刻）」という題材で、感じ取ったことや考えたことを基にした表現力の育成を目標に設定したりすることなどが考えられます。